

## „Weise am Weisen ist die Haltung“

——その依存文法的な分析——

トーマス・ミヒャエル・グロース

### A. 依存文法入門

文の分析には、二つだけの方法があると認められている。文は語から成り立っており、その語の間の関連を示す二つだけの方法がある。ブレイムフィールド (Leonard Bloomfield) は1933で書いた『Language』(言語)で言語構造主義という方法を体系的に述べており、その方法によると、文をその構成素に分析できる。例えば、The young boy ate a cookie という文では、young boy を boy に短縮でき、the young boy もその短縮された構成素も John という語に置き換えられ、the・the young・young boy だけに置き換えられないのである。従って、the (young) boy も John も同じ構成素類 (いわゆる「名詞句」) と考えられるようになった。そして、ate cookie は例えば ran という語にも置き換えられるが、ate・a cookie だけに置き換えられないので、ate a cookie も ran も同じ構成素類 (いわゆる動詞句) と見られている。ate a cookie の動詞句にはまた a cookie の名詞句が入っており、それを例えば cake・a lot of cookies・only those cookies that did not contain raisins などと置き換えられる。ブレイムフィールドは括弧を利用し、分析を形式化し、その文は、

[s[NP[DETthe][NP[Ayoung][Nboy]]][VP[vate][NP[DETA][Ncookie]]]]

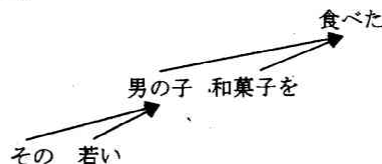
となると考えられていた。その分析方法は構成素が直接であることに基づいているので、直接構成素分析 (IC-Analysis) と呼ばれており、最近の30年間で盛んであった生成文法、GB-理論、極小主義などの構成素構文法の原型なのである。

依存文法という分析方法は構成素構文法より古いのであり、すでに数千年前もその考え方

が利用されたそうである。構成素構造文法と同様に、文を構成している語を中心にしているが、その語を構成素にまとめることなく、語に序列を付けることを問題としている。その伝統は今世紀、テニエール (Lucien Tesnière) が更に取り上げ、1959年に出版された30年代に構想された『*Éléments de syntaxe structurale*』(構造主義統語論の根本的特徴)でその方法を体系化したのである。

上の文の日本語訳は、六つの語から成り立っている「その若い男の子は和菓子を食べた」という文となる。語間の関係は段級的で、低い段級の語はより高い段級の語に関係があれば、その関係は依存関係と呼ばれる。例えば「その若い男の子」の名詞句で「男の子」を削除すれば、残る「その若い」というのは不完全になってしまう。しかし、「その男の子」も「若い男の子」も完全な構造であるので、「その」も「若い」も「男の子」に依存していなければならないだろうと考えられている。「食べた」を削除すれば、残る「その若い男の子は和菓子を」も不完全になるので、「男の子」も「和菓子」も「食べた」に依存していると見られている。他の語を依存させる能力は支配能力と呼ばれ、特に動詞の支配能力が目立っており、テニエールはそれを結合価と名づけた。文の構造または文中の依存関係を記述するため、テニエールは樹型図というものを利用した。構成素構造文法で利用される句構造厨 (PS-Marker) と違って、依存文法の樹型図は文に出てくる語だけしかつながらないという大切な区別を示し、句構造図より理解しやすいと思われる。

上の文の樹型図はこうなる。



私自身は依存文法を構成素構造文法より役に立つ方法と見ており、理解しやすく、利用しやすいと思っている。しかし、依存文法でまだ解決できない色々の問題は構成素構造文法で解決されていた。でも、最近影響力をもっている構成文法の中の GB-理論、極小主義または最新の最高主義説 (Optimality Theory) はみな言語のかなり抽象的なところを中心にしているが、具体的な結果は残念ながら少ない。一方で、依存文法は具体的な記述に強く、教科書や辞書などをたくさん作ってくれたので、特に外国語を習っている人々にもっと役に立っているに違いない。

依存文法の働き方を簡単に紹介しよう。抽象的な概説より具体的な例を見ながら、述べてみたい。

## B. 資料について

ブレヒト (Bertolt Brecht) のコイナさんの話し (Geschichten vom Herrn Keuner) を例にすることにした。この短編集の最初の作品は1930年のベルリンで『試作』(Versuche) という雑誌の第一巻に載せられた。

それぞれの短編は10以上の文を含むことはまれで、内容が割と理解しやすく、その内容も非常に国際的で面白いのである。

### Weise am Weisen ist die Haltung (Bertolt Brecht)

Zu Herrn K. kam ein Philosophieprofessor und erzählte ihm von seiner Weisheit. Nach einer Weile sagte Herr K. zu ihm; „Du sitzt unbequem, du redest unbequem, du denkst unbequem.“ Der Philosophieprofessor wurde zornig und sagte: „Nicht über mich wollte ich etwas wissen, sondern über den Inhalt dessen, was ich sagte.“ „Es hat keinen Inhalt“, sagte Herr K. „Ich sehe dich täppisch gehen, und es ist kein Ziel, das du, während ich dich gehen sehe, erreichst. Du redest dunkel, und es ist keine Helle, die du während des Redens schaffst. Sehend deine Haltung, interessiert mich dein Ziel nicht.“

## C. 分 析

テキストの分析は二つの部分からできている。まず文を作っている語を形態論的に分析し、それから得られる情報に従って統語論的記述を上げる。分析は文ごとに行う。

題を含めて文章は10個の文から成り立っている。

### ① Weise am Weisen ist die Haltung

賢者の賢はその態度にあり\*

### ② Zu Herrn K. kam ein Philosophieprofessor und erzählte ihm von seiner Weisheit.

さる哲学の教授、コイナさんのところへきて、おのれの賢明さについて語らった。

### ③ Nach einer Weile sagte Herr K. zu ihm:

ややあって、コイナさん、かれにいわく――

### ④ „Du sitzt unbequem, du redest unbequem, du denkst unbequem.“

きみはぎごちなく坐り、ぎごちなく話し、ぎごちなく考えますな、と。

### ⑤ Der Philosophieprofessor wurde zornig und sagte:

くだんの哲学教授、怒っていわく――

\* 日本語訳は、長谷川四郎『ブレヒトの小説 ベルトルト・ブレヒトの仕事 5』, 1972, p. 299の「コイナさん談義」に従う。

- ⑥ „Nicht über mich wollte ich etwas wissen, sondern über den Inhalt dessen, was ich sagte.“

わたしの知りたいと思ったのは、わたし自身のことではなくて、わたしの話したことの内容についてですよ、と。

- ⑦ „Es hat keinen Inhalt“, sagte Herr K.

それにはなんの内容ありませんね、とコイナさん、いった。

- ⑧ „Ich sehe dich täppisch gehen, und es ist kein Ziel, das du, während ich dich gehen sehe, erreichst.“

きみの歩きぶりをみていると、どたどたと不器用ですものね。きみがあるくのを、わたしがみているあいだ、きみはなんらきみのめざすところに到達していませんよ。

- ⑨ Du redest dunkel, und es ist keine Helle, die du während des Redens schaffst.

きみの話し方はうす暗くて、話しているあいだに、なんらの明るさも生みだしていません。

- ⑩ Sehend deine Haltung, interessiert mich dein Ziel nicht.“

きみの態度をみていると、わたしはきみの目標に興味をおぼえないのです。

①を除いて②から⑩までの文は置き替え合えないので、つまり文中の語が従う語順と同様に、テキスト中にも文が従わなければならない順序がある。

# [ 1 ] Weise am Weisen ist die Haltung

## [1.1] 形態論的情報

記号説明：

[ ]：語

{ }：形態素

∞：合併過程

＋：膠着過程

斜形文字：現実される音韻

成分	形態素	品詞	意味
weise:	{weise}	形容詞 (記号：A)	賢明
am:	[  an  ∞  ein  +  Em  ⇒  an   ein	前置詞 (P) 与格 (DAT) を支配する 不安冠形容詞 (DA)	～に関する

	{Em}	語尾 (+f) [DAT/-FEM/+SG]	
Weisen:	[{weise} + {En}] ⇒ 派生名詞 (N')		智慧者
	{weise}	A	
	{+En}	+f [一般格]	
ist:	{ist}	[sei.n] という動詞の異形態 (V)	
die:	[{d} + {ie}]	定冠詞 (D) [-KAS/+FEM/SG]	
Haltung:	[{halt} + {ung}] ⇒ N'		態度・ふるまい
	{halt}	V: [halt.en] の語幹	1. 持つ 2. 扱う
	{-ung}	名詞的接尾辞 (-n)	

#### [1.2] 語順と統語論的構造

形容詞の [weise] は語尾がないから、動詞にかからないといけないものである。その動詞は [ist] である。従って、[weise] は [ist] に依存しているものと認められる。

[weise] → [ist]

[am] は前置詞と冠詞的表現の合併表現なので、分類しにくいものである。だが、前置詞も冠詞的表現もほかの語を求めているものであり、前置詞はいつもある格をもとめているので、[am] を前置詞句の支配成分（頭成分）と見ればよいだろうと思っている。それに、前置詞はいつも支配されるものだから、この場合では動詞に依存している成分と見たい。

[am] → [ist]

[Weise.n] は名詞として働いているのである。一般格を指す語尾は与格を求める [am] にかかるので、その成分に依存していなければならない。

[Weise.n] → [am]

[ist] は①は中心述語なので支配されていないものである。

[d.ie] は冠詞として名詞的支配成分無しで出て来られることもあるが、この場合 [d.ie] は冠詞として名詞的支配成分無しで出て来られることもあるが、この場合では、次の成分は派生名詞なので、その表現に依存しているのである。

[d.ie] → [Halt.ung]

[Halt.ung] は冠詞を支配しており、その冠詞は女性冠詞で特別な格を指さないものである。主語、目的語のどちらでも指せる。目的語なら、動詞が他動詞に成らなければならないが、[ist] は自動詞で目的語を支配できない。従って、[Halt.ung] はその述語の主語なのである。

[Haltung] → [ist]

①の統語論的情報と語順は次のように合わせられる。一番目の語に下付き数字の1を着け、

二番目の語に 2 を付けるというようにしよう。

Weise<sub>1</sub> am<sub>2</sub> Weisen<sub>3</sub> ist<sub>4</sub> die<sub>5</sub> Haltung<sub>6</sub>

それを「語順指数」とよぶ。次の語の前にその語の支配成分の語順指数を下付き数字として付ける。支配成分のない語、つまり文の述語には「0」を付けばよい。

<sub>4</sub>Weise<sub>1</sub> <sub>4</sub>am<sub>2</sub> <sub>2</sub>Weisen<sub>3</sub> <sub>0</sub>ist<sub>4</sub> <sub>6</sub>die<sub>5</sub> <sub>4</sub>Haltung<sub>6</sub>

それを「支配指数」という。簡単な三角法の原則を利用し、樹型図が作れる。まず、↓(下)と←(左)の関係記号を定義しなければならない。問題点を除き、簡単にすると、次のような説明になる。

もし、「A」という成分が「B」という成分に依存すれば、「A↓B」と書けばよいことにする。それを「AはBの下にある」と具体的に読めばよい。その場合では、AはBの前にか後にか出てくるものなのかまだ分からないから、次には、そのことをはっきりとしなければならない。もし、AがBのまえに出てくれば、「A←B」と書けばよく、更にそれを「AはBの左にある」と読めばよいことにする。もし、順番が逆なら、「B←A」と書かなければならなくなる。日本語なら、この二つの関係で文の分析するために十分であるが、ドイツ語では語順が複雑であるので、「→」(右)という関係記号も望ましい。すると、「A←B」を元にし、「B→A」という関係も成り立つことになる。

その三つの関係を合わせることができる。例えば A は B に依存しその前に出てくれば、「AはBの下と展にある」という状態になるので、それを「A←↓」と書けばよいのである。もし、A・B・C という三つの成分があり、その関係は「AはBの下と左にある」と「BはCの下と左にある」ということなら、「A←↓B」「B←↓C」(⇒「A←↓B←↓C」)と書けばよい。もし、その関係は「AはCの下と左にある」と「BはCの下と左にある」なら、「A←←↓C」「B←↓C」と書けばよいのである。

従って、

<sub>4</sub>Weise<sub>1</sub> <sub>4</sub>am<sub>2</sub> <sub>2</sub>Weisen<sub>3</sub> <sub>0</sub>ist<sub>4</sub> <sub>6</sub>die<sub>5</sub> <sub>4</sub>Haltung<sub>6</sub>

という構造は次のように書き換えられる。

<sub>4</sub>Weise<sub>1</sub>←←←↓<sub>0</sub>ist<sub>4</sub>

<sub>4</sub>am<sub>2</sub>↓→→<sub>4</sub>am<sub>2</sub>

weisen<sub>3</sub>↓→→<sub>0</sub>ist<sub>4</sub>

<sub>6</sub>die<sub>5</sub>←↓<sub>4</sub>Haltung<sub>6</sub>

<sub>4</sub>Haltung<sub>6</sub>↓→→<sub>0</sub>ist<sub>4</sub>

左右記号の数は次の式で計算できる。支配指数－語順指数。例：weise の支配指数は「4」で、その語順指数は「1」なので、「 $4-1=3$ 」だから、左右記号は三本の矢印に成らなければならないのである。計算結果は「+ [数字]」なら、矢印は左に向き、「- [数字]」なら、矢印は右に向くことになる。

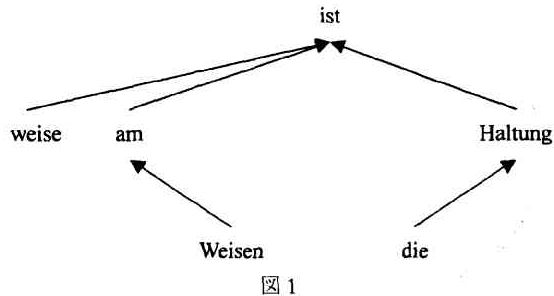
さて、樹型図を作るため、二つの成分をつなげる枝の角度と長さのデータが必要である。枝の長さは、

$$\sqrt{((-1)^2 + (\text{語順指数} - \text{支配指数})^2)}$$

で計算でき、角度は、

$$\tan \theta = x/y$$

で計算できる。それで、長さを  $\lambda$  とし、角度を  $\varphi$  とすれば、つなげる枝はベクトル  $(\lambda, \varphi)$  になるのである。樹型図の作業の細かいポイントを無視し、①の文の樹型図はこうなる。



〔2〕 Zu Herrn K. kam ein Philosophieprofessor und erzählte ihm von seiner Weisheit.

〔2.1〕 形態論的情報

記号説明：

◎：合成過程（囲まれた所に入る）

成分	形態素	品詞	意味
zu	{zu}	P [DAT]	～に・へ
Herrn	{Herr} + {n}	N+f	
	{Herr}		～さん [男性]
	{+n}	*f [DAT/SG]	
K.	{K(euner)}	N [姓]	カー(コイナ)
kam	{kOmm} ◎ {過去}	V◎f	来た
ein	{ein}	DA	

Philosophieprofessor	[ {Philosophie} + {Professor} ]	⇒ N'	哲学教授
	{Philosophie}	N	哲学
	{Professor}	N	教授
und	{und}	接続詞 (K)	
erzählte	[ {erzähl} + {Ete} ]	V+f	語らった
	{erzähl}	動詞語幹 (Vst)	語らう
	{+Ete}	+f [過去形]	
ihm	{ihm}	代名詞 (PN) [DAT/M/SG]	彼に
von	{von}	P [DAT]	1. から
			2. <u>～について</u>
seiner	[ {sein} + {er} ]	⇒ DA	彼の
	{sein}	DA	彼の
	{+er}	+f [DAT/F/SG]	
Weisheit	[ {Weis} + {heit} ]	⇒ N'	知恵・学識・賢
			明さ
	{weise}	A	賢明
	{-heit}	-n	

## [2.2] 統語論的情報

この文には二つの大きな問題点が出てくる。und という並列接続詞とその関係、代名詞のかかりである。並列接続詞の扱い方はどんな文法論でも問題になると広く認められている。「A and B」という構造では、A も B も同じく接続詞に依存しているような考え方が多い。その立場の問題点は接続詞が一番上の支配成分になってしまい、それはあまり望ましくない。並列接続詞を鏡の機能を果たすものと見ると、もっと役に立つようになるのではないかと思いますので、そんなふうに扱ってみたいと思う。並列接続詞には二つの成分をつなぐ機能があるので、そのつながれる成分の最初のを接続詞の支配成分と見て、二つ目の成分をその接続詞に依存しているものと見るのがよいと思っている。従って、この文では、kam が接続詞の und を支配し、und が erzählte を支配することにする。

どんな言語にも意味や機能などを変えない言葉があるが、文脈によって意味または機能が変化する言葉もある。代名詞・所有冠詞は英語で shifter と言われている。文②には二つの shifter がある。ihm と seiner。簡単に言うと、代名詞は普通は関係する名詞 (= 指示成分) の後に出てくるが、英語とドイツ語では代名詞が指示成分の前に出てくることがある。しかし、どんな言語であっても、前でも後でも、代名詞とその指示成分は同じ支配成分に依存してはいけないということが分かってきた。指示成分とその代名詞が同じ支配成分に依存でき

ないことを言語の普遍原理と認めてきた。日本語でもその原理が有効であるが、代名詞が指示成分の後に出てくることに限られているのである。

その上、英語とドイツ語には前方照応詞 **Anaphora** があり、代名詞と違って指示成分と同じ支配成分に依存してもかまわない。従って、英語とドイツ語の再帰代名詞は代名詞ではなく、前方照応詞なのである。日本語の自分（自身）というのも前方照応詞である。

所有冠詞は代名詞か前方照応詞かであるかという問題がある。英語と日本語では所有冠詞に代名詞の特徴があるらしいので、指示成分と同じレベルにはでてこれられないようである。例えば、日本語の（私は）彼女のが好きだという文は英語の *I like hers* という文に成らなければならない、その所有代名詞の *her* の後に *-s* を付けないと正しくならない。

代名詞・前方照応詞とその指示成分の働き方は特にテキスト文法では非常に大切に、テキスト中の文をつなぐ手段であるわけである。

4Zu<sub>1</sub> 1Herrn<sub>2</sub> 2K.<sub>3</sub> 0kam<sub>4</sub> 6ein<sub>5</sub> 4Philosophieprofessor<sub>6</sub> 4und<sub>7</sub> 7erzählte<sub>8</sub> 8ihm<sub>9</sub> 8von<sub>10</sub>  
12seiner<sub>11</sub> 10Weisheit<sub>12</sub>.

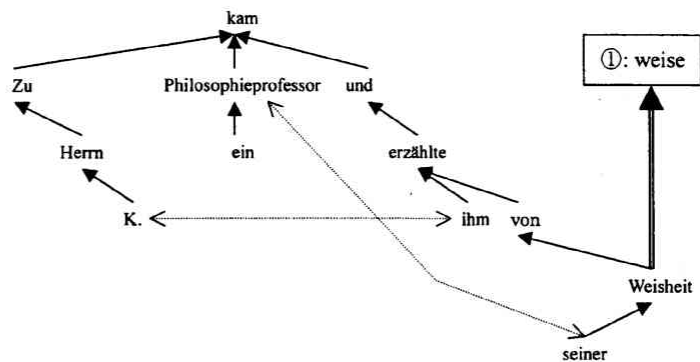


図 2

〔 3 〕 Nach einer Weile sagte Herr K. zu ihm:

〔3.1〕 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
nach	{nach}	P [DAT]	後
einer	[ {ein} + {er} ]		
	{ein}	DA	
	{+er}	+f [DAT/F/SG]	
Weile	{Weile}	N [F]	しばらくの間
sagte	[ {sag} + {Ete} ]	V+f	話した

	sag	Vst	話す
	+Etc	+f [過去形]	
Herr	{Herr	N+f	～さん [男性]
K.	{K(euner)	N [姓]	カー (コイナ)
zu	zu	P [DAT]	～に・へ
ihm	ihm	PN [DAT/M/SG]	彼に

## [3.2] 統語論の情報

4Nach<sub>1</sub> 3einer<sub>2</sub> 1Weile<sub>3</sub> 0sagte<sub>4</sub> 4Herr<sub>5</sub> 5K.<sub>6</sub> 4zu<sub>7</sub> 7ihm<sub>8</sub>:

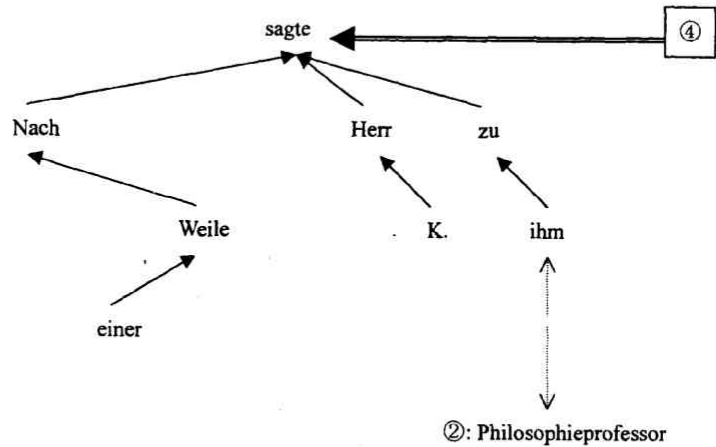


図 3

[4] „Du sitzt unbequem, du redest unbequem, du denkst unbequem.“

## [4.1] 形態論の情報

成分	形態素	品詞	意味
du	{du	PN	あなた・君
sitzt	[ {sitz  ∞ {Est  } ]	V+f	座っている
	{sitz	Vst	座っている
	{+Est	+f [2SG/現在形/直説法]	
unbequem	[ {un-  + {bequem  } ]	q-A	不快適
	{un-	接頭辞 (q-) [否定]	無・不・非
	{bequem	A	快適
redest	[ {red  {Est  } ]	V+f	話している

	red	Vst	話す
denkst	[ denk  +  Est ]	V+f	考えている
	denk	Vst	考える

## 〔4.2〕 統語論的情報

この文は並行的構造から成っている。代名詞・動詞・副詞的形容詞。従って、一つの文ではなく、同じ構造のある三つの文なのである。並列接続詞がなくても、それを並列法と見ることができる。しかし、その三つの構造間に並列接続詞 *und* を入れられるので、最初の動詞を二つ目の動詞の支配成分と見て、更にそれを最後の動詞の支配成分と見ればよいではないかと考える。

„2Du<sub>1</sub> 6sitzt<sub>2</sub> 2unbequem<sub>3</sub>, 5du<sub>4</sub> 2redest<sub>5</sub> 5unbequem<sub>6</sub>, 8du<sub>7</sub> 5denkst<sub>8</sub> 8unbequem<sub>9</sub>.“

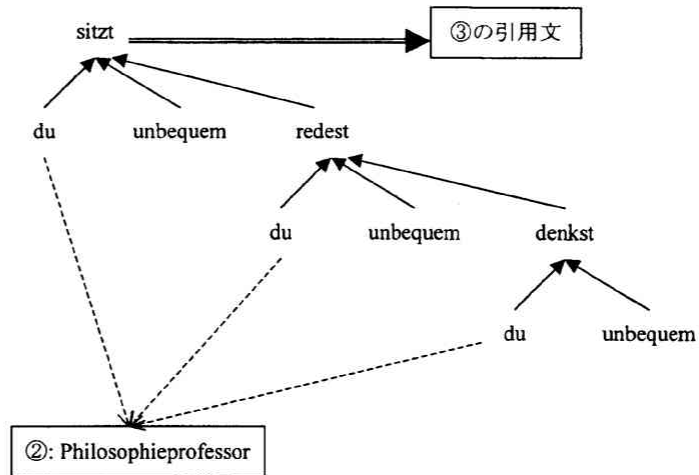


図 4

この文は直接話法なので、代名詞 *du* は Philosophieprofessor を指す。

## 〔5〕 Der Philosophieprofessor wurde zornig und sagte:

## 〔5.1〕 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
Der	[ d  +  er ]	D+f	この～は
	d	D	
	+er	+f [NOM/M/SG]	

Philosophieprofessor 参考 [2.1] N'

哲学教授

wurde [ {wE}rd | © |過去| + |+E| ]

成った

{wErd|

Vst

成る

{+E|

+f [-2SG]

zornig [ {zorn| + |ig| ]

怒っている

{Zorn|

N-a

怒り

{-ig|

形容詞的接尾辞 (-a)

sagte [ {sag| + {Ete| ]

V+f

話した

## 〔5.2〕 統語論の情報

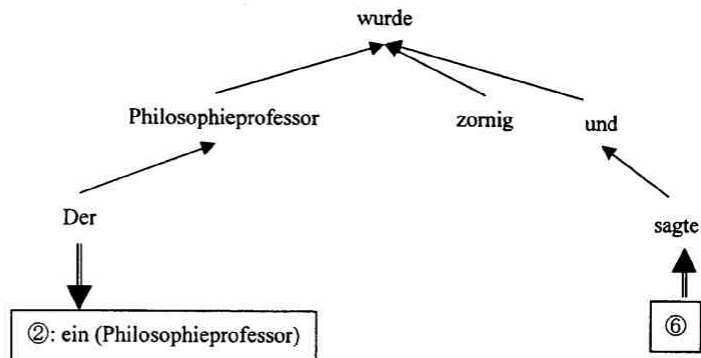
 $_2\text{Der}_1\text{ }_3\text{Philosophieprofessor}_2\text{ }_0\text{wurde}_3\text{ }_3\text{zornig}_4\text{ }_3\text{und}_5\text{ }_5\text{sagte}_6:$ 

図 5

〔6〕 „Nicht über mich wollte ich etwas wissen, sondern über den Inhalt dessen, was ich sagte.“

## 〔6.1〕 形態論の情報

成分	形態素	品詞	意味
nicht	{nicht	副詞 (M) [否定]	
über	{über	P [ACC]	～について
mich	{mich	PN [1SG/ACC]	私を
wollte	[ {wOll  +  過去  +  E  ]	V-v+f	～たいと思った
	{wOll	Vst	～たい・欲しい
	{+E	+f [-2SG]	

ich	{ich}	PN [1SG/NOM]	私が
etwas	{etwas}	PN	何か
wissen	[ {wiss} + {En} ]	V-n	知る
	{wIss}	Vst	知る
	{-En}	-n [不定形]	
sondern	{sondern}	従属接続詞 (S)	
den	[ {d} + {en} ]	D+f	
	{d}	D	
	{+en}	[ACC/M/SG]	
Inhalt	{Inhalt}	N [M]	内容
dessen	[ {d} + {eS} + {en} ]	D-d+f	
	{d}	D	
	{-eS}	冠詞的接尾辞 (-d) [-F/SG/GEN]	
	{+en}	関係語尾 (+f)	
was	{was}	疑問詞 (Q) [-HUM]	何
sagte	[ {sag} + {Ete} ]	V+f	話した

## [6.2] 統語論的情報

この文は統語論的に複雑なところが多い。例えば前置詞句の *über mich* が否定副詞の *nicht* の作用範囲にあると考えるしかないのも、その前置詞句は否定副詞に依存しなければならない。なお、否定副詞と従属接続詞の *sondern* が機能表現に近くて決まった構造となるので、従属接続詞が否定副詞に依存していることを考えざるを得ない。さて、その接続詞は同じ前置詞にされる句を支配している。*nicht*~*sondern* の関連はいつも同じく非連続性を起してしまうので、記述しにくいと認められている。その特徴について後で述べよう。

他の難しいところは *Inhalt* にかかる関係冠詞の *dessen* である。その冠詞は形態論的に複雑で、非女性名詞（記号：[-F]）を指すものである。普通の冠詞は格も性も支配する名詞を通じて動詞などから受け取る。関係冠詞の場合は、性にかかる名詞が派生名詞からもらい、格は関係複文中の一番上の支配成分からもらう。これは英語と一緒になので、まだそれほど複雑でなさそうである。しかし、*dessen* の場合は、格も性も *Inhalt* からもらっている。*Inhalt* は男性名詞で、その右側に出てくる依存成分を所有格でしか支配できないのである。その理由は *dessen* は関係複文の成分ではなく、動詞に支配されてないのである。支配できる動詞がなければ、格を関係する名詞からもらわなければならない。*dessen* は *was* という関係疑問詞を支配しているので、自分で関係複文の成分であってはいけないのである。関係複文の *was ich sagte* の中では、関係冠詞の役割を負っている疑問詞の *was* は動詞の目的語で

も、それを支配している。その理由は語順なのである。関係複文の中では、関係冠詞は（前置詞に依存する場合を除き）最初の成分でなければならないのである。そして、性は前の名詞からもらわないといけないので、関係複文では性は格より優先される。

7Nicht<sub>1</sub> 1über<sub>2</sub> 2mich<sub>3</sub> 0wollte<sub>4</sub> 4ich<sub>5</sub> 7etwas<sub>6</sub> 4wissen<sub>7</sub>, 1sondern<sub>8</sub> 8über<sub>9</sub> 11den<sub>10</sub> 9Inhalt<sub>11</sub>  
1dessen<sub>12</sub>, 12was<sub>13</sub> 15sich<sub>14</sub> 13sagte<sub>15</sub>

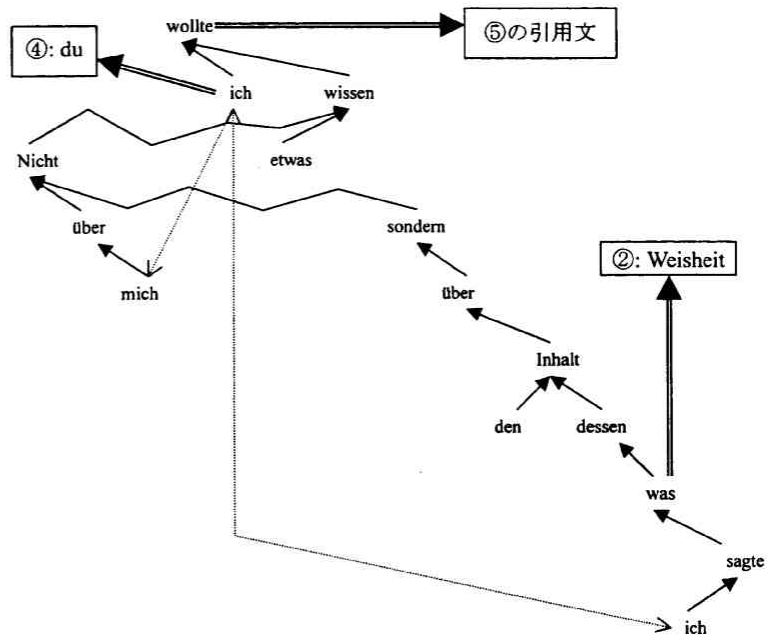
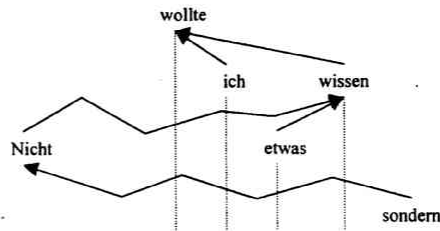


図 6

この樹型図では折れ曲った矢印が二本見える。この矢印は非連続性の統語関係を指しているものである。非連続性という現象はどんな文法でも記述しにくく、生成文法の一つの存在理由となっていた。IC（直接成分）分析という方法では、この現象は説明されなかったのである。非連続性というのは、ある成分は自分の支配成分の直接隣にない場合に起こる。例えば、A-B-C-D という構造は、A は C に依存し、C は D に依存することにしよう。もし、B が A にも C にも依存しないのなら、非連続性が生じてしまう。その現象は括弧構造で図示できなくなってしまった。依存文法の樹型図では、二つの場合に非連続性が見てとれる。ひとつは、矢印が交差してしまうことである。図 8 では交差する矢印が見えない。他は、樹型図の語から下へ伸びる垂直線を想像し、ある矢印がある垂直線と交差するなら、それも非連続性となる。



上図であきらかなように、nicht からの矢印は wollte と ich からの垂直線と交差してしまう。その上、sondern からの矢印は自分とその支配成分の nicht の間にあるすべての成分の垂直線と交差してしまう。しかし、樹型図は、統語論的關係を決めた後の結果なので、非連続性の原因は統語論的關係だと考えられる。統語論的信息は決められた指数情報と同じなので、それを分析すれば理解できる。語順指数が支配指数より大きいなら、その成分を遠心的・逆行的成分と名づけ、小さければ求心的・進行的成分と名づける。さて、nicht は進行的成分で、sondern は逆行的成分である。まず、nicht に生じた非連続性を調べよう。nicht の語順指数（記号：L）は  $|1|$  で、支配指数（B）は  $|7|$  である。垂直線と交差する最初の成分 wollte の語順指数は  $|4|$  で、支配指数は  $|0|$  である。それは次のように表現できる。

$$G(\text{nicht}) = |7| > L(\text{wollte}) = |4| > L(\text{nicht}) = |1| > G(\text{wollte}) = |0|$$

この形式には二つの特徴がある。同じ成分は隣に成らないし、指数の値が違っている。こういう状態になれば、非連続性が起こっている印なのである。sondern と wollte を比べてみると、その原理が守られている。

$$L(\text{sondern}) = |8| > L(\text{wollte}) = |4| > G(\text{sondern}) = |1| > G(\text{wollte}) = |0|$$

この二つの式の指数が順序が違う理由は nicht は進行的成分であるが、wollte と sondern は逆行的成分だからである。最初の式は非連続性を起す成分だけが進行的であり、次の式は一般逆行的非連続性の形式なのである。なお、非連続性の場合、式によって計算できる成分の間に他の成分があれば、その成分にも非連続性の影響を及ぼすこともある。しかし、これには条件がある。まず、その成分は非連続性を起された成分と起した成分の支配成分の間になければならない。そして、その成分は非連続性を起した成分とは指数の値が異なっていなければならないという帰納的な条件がある。この二つの条件は同時にみたされなければならない。これらの条件により、nicht の矢印は ich の垂直線と交差してもよく、etwas と同じ支配指数があるので、その垂直線と交差してはいけない。sondern の矢印は wissen から wollte までの垂直線と交差してしまうが、nicht に依存している über と mich の垂直線とは交差できない。über は sondern と同じく nicht に依存しているので、同じ支配指数をもつ。しかし、mich の指数の値と違って、指数条件が帰納的なので、その垂直線とも交差でき

ないのである。

[7] „Es hat keinen Inhalt“, sagte Herr K.

[7.1] 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
es	{es}	PN [-KAS/N/SG]	それ
hat	[ {haB} + {Et} ]	V+f	持っている
	{haB}	Vst	
	{+Et}	+f [3SG 現在形/直説法]	
keinen	[ {kein} + {en} ]	DA+f	
	{kein}	DA [否定]	
	{+En}	+f [ACC/M/SG]	
Inhalt	{Inhalt}	N [M]	内容
sagte	[ {sag} + {Ete} ]	V+f	話した
Herr	{Herr}	N+f	～さん [男性]
K.	{K(euner)}	N [姓]	カー (コイナ)

[7.2] 統合論的情報

„2Es1 5hat2 4keinen3 2Inhalt4“, 0sagte5 5Herr6 6K.7

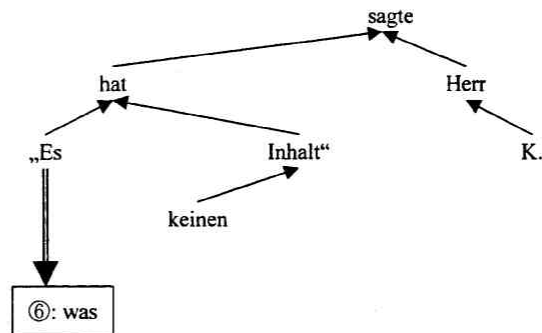


図 7

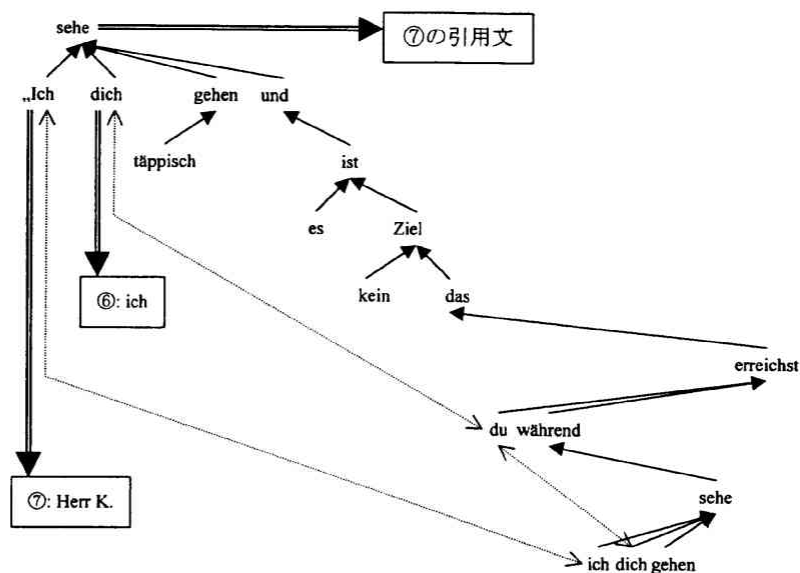
[ 8 ] „Ich sehe dich täppisch gehen, und es ist kein Ziel, das du, während ich dich gehen sehe, erreichst.“

[8.1] 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
ich	{ich}	PN [1SG/NOM]	私が
sehe	[ {sEh} + {e} ]	V+f	見ている
	{seh}	Vst	
	{+e}	+f [1SG]/現在形/直説法	
dich	{dich}	PN [2SG/ACC]	あなたを
täppisch	{täppisch}	A	へたくそに
gehen	[ {gEH} + {en} ]	V-n	歩く
	{gEH}	Vst	
	{-En}	-n	
und	{und}	K	
es	{es}	PN [-KAS/N/SG]	それ
ist	{ist}	V [3SG/現在形/直説法]	～である
kein	{kein}	DA [-KAS/-F/否定]	
Ziel	{Ziel}	N [N]	目的
das	[ {d} + {as} ]	D+f	それ
	{d}	D	
	{+as}	+F [-KAS/N/SG]	
du	{du}	PN	あなた・君
während	{während}	S	～しながら
erreichst	[ {erreich} + {Est} ]	V+f	届ける
	{erreich}	Vst	
	{+Est}	+f [2SG/現在形/直説法]	

[8.2] 統語論的情報

„2Ich<sub>1</sub> 6sehe<sub>2</sub> 2dich<sub>3</sub> 5täppisch<sub>4</sub> 2gehen<sub>5</sub>, 2und<sub>6</sub> 6es<sub>7</sub> 6ist<sub>8</sub> 10kein<sub>9</sub> 8Ziel<sub>10</sub>, 10das<sub>11</sub> 18du<sub>12</sub>,  
18während<sub>13</sub> 17ich<sub>14</sub> 17dich<sub>15</sub> 17gehen<sub>16</sub> 13sehe<sub>17</sub>, 11erreichst<sub>18</sub>.“



[9] Du redest dunkel, und es ist keine Helle, die du während des Redens schaffst.

[9.1] 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
Du	{du}	PN	あなた・君
redest	[ {red} + {Est} ]	V+f	話している
	{red}	Vst	話す
	{+Est}	+f [2SG/現在形/直説法]	
dunkel	{dunkel}	A	暗い：曖昧に
und	{und}	K	
es	{es}	PN [-KAS/N/SG]	それ
ist	{ist}	V [3SG/現在形/直説法]	～である
keine	[ {keine} + {e} ]	DA+f	
	{kein}	DA [否定]	
	{+e}	+f [-KAS/F/SG]	
Helle	[ {hell} + {+e} ]	A-n	明るさ
	{hell}	A	明るい
	{-e}	-n	～さ
die	[ {d} + {ie} ]	D+f	

	{d}	D	
	{+ie}	+f [-KAS/F/SG]	
während	{während}	S	～しながら
des	[ {d} + {es} ]	D+f	
	{d}	D	
	{+ie}	+f [GEN/-F/SG]	
Redens	[ {red} + {en} + {s} ]	V-n+f	話しの
	{red}	Vst	話す
	{-En}	-n	
	{+s}	+f [GEN/SG]	
schaffst	[ {schAff} + {Est} ]	V+f	作る
	{schAff}	Vst	作る
	{+Est}	+f [2SG/現在形/直説法]	

## [9.2] 統合的信息

2Du<sub>1</sub> 0redest<sub>2</sub> 2dunkel<sub>3</sub>, 2und<sub>4</sub> 6es<sub>5</sub> 4ist<sub>6</sub> 8keine<sub>7</sub> 6Helle<sub>8</sub>, 8die<sub>9</sub> 14du<sub>10</sub> 14während<sub>11</sub> 13des<sub>12</sub>  
 11Redens<sub>13</sub> 9schaffst<sub>14</sub>.

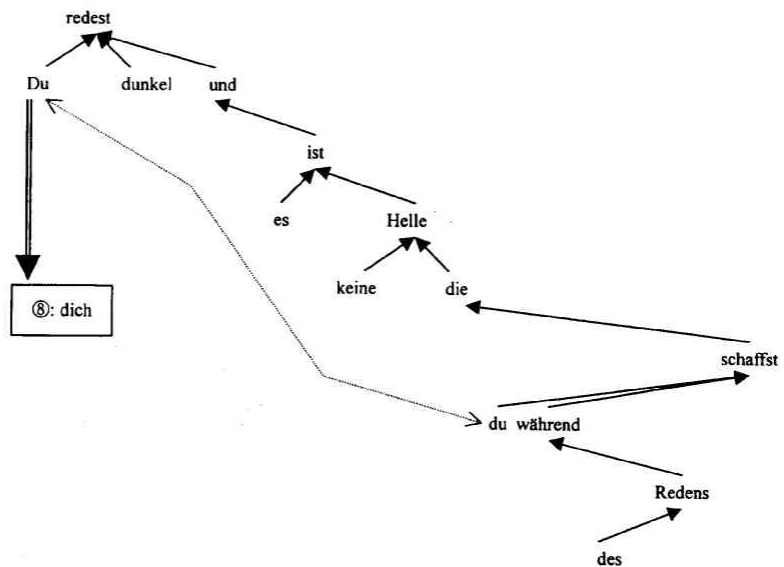


図 9

[10] Sehend deine Haltung, interessiert mich dein Ziel nicht.“

[10.1] 形態論的情報

成分	形態素	品詞	意味
Sehend	[ {sEh} + {En} + {d} ]	V-n+f	見ながら
	{sEh}	Vst	見る
	{+En}	-n [不定形]	
	{+d}	+f [形容詞的現在分詞]	
deine	[ {dein} + {e} ]	DA+f	あなたの
	{dein}	DA	あなた・君
	{+e}	+f [-KAS/F/SG]	
Haltung:	[ {halt} + {ung} ]	N'	態度
	{halt}	Vst	扱う
	{-ung}	-n	
interessiert	[ {interssier} + {Et} ]	V+f	興味を持たせる
	{interssier}	Vst	興味を持たせる
	{+Et}	+f [3SG/現在形/直説法]	
mich	{mich}	PN [1SG/ACC]	私を
dein	{dein}	DA [-KAS/-F/SG]	あなたの
Ziel	{Ziel}	N [N]	目的
nicht	{nicht}	M [否定]	

[10.2] 統語論的情報

<sub>4</sub>Sehend<sub>1</sub> <sub>3</sub>deine<sub>2</sub> <sub>1</sub>Haltung<sub>3</sub>, <sub>0</sub>interessiert<sub>4</sub> <sub>4</sub>mich<sub>5</sub> <sub>7</sub>dein<sub>6</sub> <sub>4</sub>Ziel<sub>7</sub> <sub>4</sub>nicht<sub>8</sub>.

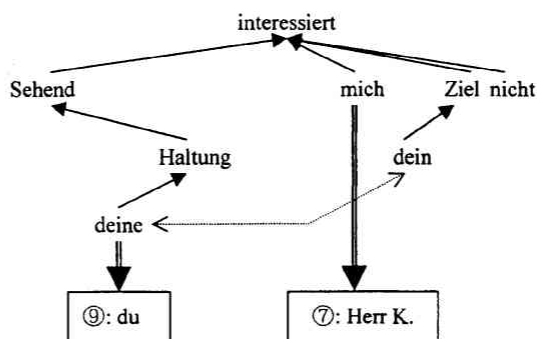


図10

## D. テキスト文法

①～⑩の文中の言葉がつながっているようには、①～⑩の文もつながっていると考えられている。統語論というのは、文の範囲に限られるので、文中の現象だけを記述できる方法と広く見られる。英語で統語にあたる *syntax* は古代ギリシャ語の *syntaxis* からでき、*syn-* というのは一緒と、*taxis* は整理するという動詞の *tassein* からできている。そうすると、*syntax* は「きちんと整理されたこと」という意味なのである。なお、この概念をテキストに応用する可能性があるが、テキストと文は別の部分から成り立っているので、応用方法も異なることになると考えられている。文から成り立っている「テキスト」はラテン語で「組織」にあたる *textus* からでき、それは動詞の「織る」= *texere* からできている。そうなら、テキストは文で組み立てられたものと見ればよいだろう。その組み立て方にも規則があり、一番大切な手段が代名詞化であろう。

①～⑩の文には、代名詞化が10回出てくる。樹型図では「⇒」という矢印が文の関連を指している。引用文も3回出てくる。代名詞化以外、焦点化も大切な手段である。英語とドイツ語には冠詞があり、不定冠詞が定冠詞になることで、前の文との関連ができるという焦点化の手段がある。文で伝えられる新しい情報はまず不安冠詞で指されて焦点に載っており、同じ情報を後で再び取り上げられる場合には、焦点から移動させて定冠詞で指されることになる。日本語には定冠詞がなく、焦点化を果たすものは係り助詞なのである。

さて、①～⑩の文間には次の関連があるだろう。

- ① はテーマである。
- ② はテキストのセッティング（一般導入）であり、*Weisheit* が①の *weise* または *Weisen* を再び取り上げることで、①と語彙論的関連がある。
- ②→①
- ③ は代名詞 *ihm* が②の *Philosophieprofessor* を指すものなので、②と代名詞化の関連がある。
- ③→②
- ④ は③にかかる引用文（*sagte* の目的文）であり、③と関連がある。その上、*du* が②の *Philosophieprofessor* を指す代名詞なので、②にも代名詞化の関連がある。
- ④→②・③
- ⑤ は定冠詞の *der* は②の不定冠詞の *ein* (*Philosophieprofessor*) で指されたテーマ（新しい情報）をテーマとしてとりあげ、②と焦点化の関連がある。
- ⑤→②
- ⑥ は⑤の引用文なので、⑤と関連がある。*ich* の代名詞は④の *du* で、それが②の *Philosophieprofessor* を指しているので、④と代名詞化の関連があり、*was* は②の

Weisheit を指しているのです、②とも代名詞化の関連がある。

⑥→②・④・⑤

⑦ は es の代名詞が⑥の was を指しているのです、⑥と代名詞化の関連がある。

⑦→⑥

⑧ は⑦の引用文で、⑦と関連がある。その上、ich の代名詞が⑦の Herr K. を指しているのです、⑦と代名詞化の関連もある。代名詞の dich は⑥の ich (④の du と②の Philosophieprofessor を通って) を指しており、⑥とも代名詞化の関連がある。

⑧→⑥・⑦

⑨ はまだ引用文の部分で、du の代名詞が⑧の dich を指しているのです、⑧と代名詞化の関連がある。

⑨→⑧

⑩ もまだ引用文の部分であり、deine の所有冠詞が⑨の du を指しているのです、⑨と代名詞化の関連がある。その上、much の代名詞がその引用文の⑦の herr K. という話し手を指しているのです、⑦とも代名詞化の関連がある。

⑩→⑦・⑨

その関連タイプを区別しながらその結果を下の表に示す。

文	代名詞化関連	引用関連	焦点化関連	語彙的関連
②				1
③	2			
④	2	3		
⑤			2	
⑥	2 4	5		
⑦	6			
⑧	6 7	7		
⑨	8			
⑩	7 9			

この関連を樹型図で示すと、次のようになる。

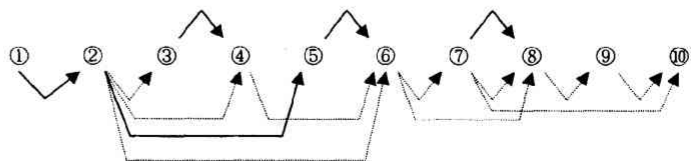


図11

上の矢印は引用文の関連を指し、下の矢印の破線は代名詞化の関連を指す。図11を見ると、一番大切な文が②だということが分かるだろう。②はこの話しの導入部なのである。そして、⑥も⑦もかなり大切であるらしい。⑦は⑥の引用文に対する反応で、⑧～⑩が結論と成る部分なのである。

図11にもテキストの連続性がよく見える。文の秩序は決まっており、破ればテキストの意味も崩れてしまう。

## E. まとめ

本稿では、作家ブレヒトの短編を例とし、その組み立てを依存文法上で記述してみた。依存文法は語の組み立てについても、文とテキストの関係についても、具体的な情報を上げることができ、語、文、テキストのどのレベルでも、適当な方法であることを認めてもらおうと思った。

なお、私の時々複雑な説明は輝くところがなくて理解しがたくても、それをブレヒト作家が紹介した哲学の教授の窮屈そうな智慧と見てもらわないように願っている。

## 文献

- Archangeli, Diana & Langendoen, D. Terence (eds.): *Optimality Theory: An Overview*. Malden, Mass. & Oxford: Blackwell Publishers Inc. 1997.
- Bloomfield, Leonard (1933): *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Chomsky, Noam (1957): *Syntactic Structures*. Mouton: Den Haag.
- (1981): *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- (1992): *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics 1. Dept. of Linguistics, Philosophy, MIT: Cambridge.
- Engel, Ulrich (1982<sup>2</sup>): *Syntax der deutschen Gegenwartssprache*. Zweite Auflage. Berlin 1977.
- Eroms, Hans-Werner (1985): *Eine reine Dependenzgrammatik des Deutschen*. In: *Zeitschrift für deutsche Sprache* 13, 306-326.
- (1986): *Funktionale Satzperspektive*. Niemeyer: Tübingen.
- Gaifan, Haim (1961): *Dependency Systems and Phrase Structure Systems*. Rand corporation. Santa Monica, C.A.
- Groß, Thomas Michael (1992): *Konstruktive Stemmatalogie*. In: *Papiere zur Linguistik* Nr. 47: 115-139.
- (1995a): *Theorie hierarchischer Relationen*. In: *Beiträge zum Symposium "Valenz und Dependenz"*. Eroms, Hans-Werner & Eichinger, Bernd (eds.); Passau. 85-97.
- (1995b): *Binding in Dependency Syntax: In Defense of Flat Structures*. In: *Prague Bulletin of Mathematical linguistics* No. 63. Prague. 35-65.
- (1996): *On Getting a Head: A Solution for Dependency Grammar*. In: *Prague Linguistic Circle*

- Papers Vol.* Hajičová, Eva et al. (eds.). Prague. 85-100.
- Hays, David G. (1964): Dependency theory: A Formalism and some Observations. *Language* 40, 511-525.
- (1965): An Annotated Bibliography of Publications on Dependency Theory. Memorandum RM-4479-PR.
- Heringer, Hans-Jürgen (1970): Einige Ergebnisse und Probleme der Dependenzgrammatik. In: *Der Deutschunterricht* 4; 42-98.
- (1973<sup>2</sup>): Theorie der deutschen Syntax. Baumgärtner, Klaus et al. (eds.) München 1970.
- Hudson, Richard R. (1984): Word Grammar. Oxford, N.Y.
- 児玉徳美: 依存文法の研究, 東京: 研究社出版, 1987.
- Kunze, Jürgen (1975): Abhängigkeitsgrammatik. Berlin.
- Lobin, Henning (1993): Koordinationssyntax als prozedurales Phänomen. Narr: Tübingen.
- Mel'čuk, Igor (1979): Studies in Dependency Syntax. Albany.
- (1988): Dependency Syntax: Theory and Practice. Albany.
- Owens, Jonathan (1984): On Getting a Head: A Problem in Dependency Grammar. In: *Lingua* 62: 1/2, 25-42.
- Panevová, Jarmila & Sgall, Petr (1990): Dependency Syntax: Its Problems and Advantages. In: *Prague studies in mathematical linguistics*. Hajičová, Evá et al. (eds.). Amsterdam. 187-199.
- Percival, Keith (1990): Reflections on the History of Dependency Notions in Linguistics. In: *Historiographica Linguistica* XVii: 1/2. Benjamins: Amsterdam. 29-47.
- Radford, Andrew (1997): Syntax: A Minimalist Introduction. Cambridge: Cambridge University Press.
- Robinson, Jane R. (1967): A Dependency Based Transformational Grammar. Rand Corporation. Yorktown Heights, N.Y.
- (1970): Dependency Structures and Transformational Rules. In: *Language* 46; 259-285.
- Tesnière, Lucien (1959): *Éléments de syntaxe structural*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Vater, Heinz (1975): Toward a Generative Dependency Grammar. In *lingua* 36; 121-145.

[付記] 安藤良太先生には全文に目を通していただき、日本語の表現を中心に適切なコメントをいただいた。ここに記して感謝にかえたい。

### Abstract

This paper deals in explaining the general idea of dependency theory, and shows how an application to a short text should work. First, the idea of dependency is contrasted with the widely used constituency model. Taking Bertold Brecht's first short-short story „Weise am Weisen ist die Haltung“ as an example corpus, an morphosyntactic analysis is followed up by dependency based sentence structuring. In a last step, an application of dependency theory to the text level is attempted. Specific problems for dependency grammar (or any other framework) are introduced and dealt with when they occur in the corpus.